中京学院大学看護学部
紀要　第２巻第１号
2012年７月発行

# 看護大学生の高齢者のイメージ
## ― 高齢者施設における実習前後の変化 ―

# Nursing Students' Images to Elderly People
## ― Changes before and after Training in Nursing Homes ―

穴井美恵・荻野朋子・大平政子
Mie Anai, Tomoko Ogino and Masako Ohira

**要　旨**

看護学部１年次生を対象とした３日間の実習において，実習前後の高齢者に対するイメージの変化を明らかにし，本学における老年看護学の教育内容を検討するための資料とした．方法は無記名の自記式質問紙で行い，高齢者のイメージについては17項目からなるSD法を用いて調査した．結果より，以下のことが明らかになった．

① 実習前後を通して，学生は高齢者に対して全体的に肯定的なイメージをもっていた．「あたたかな」「経験に富む」については高い平均点を維持していた．また，「ひまな」「弱い」というイメージも形成しており，この２項目については実習前後での変化が見られなかった．

② 実習前後で有意差が認められた項目は，「穏やかな―はげしい」，「現実的な―空想的な」，「楽天的な―悲観的な」の３項目であり，実習後に平均点が下降した．

③ 実習体験が学生の高齢者イメージの形成や変化に大きな影響を与えていると考えられる．

キーワード(Key words)：看護学生（Nursing Student），高齢者のイメージ（Images to Elderly People），実習（Training）

## １．はじめに

2010年の高齢社会白書によると，日本の高齢化率は23.1%（平成22年10月１日現在）で，世界に比を見ないスピードで超高齢社会に突入した[1]．それに伴い看護の対象も高齢者が多くなっており，学生が臨地実習で関わる対象も高齢者が大半を占めている．

しかし，高度経済成長期を境にして核家族化が進行し[2]，高齢者と生活した経験のある若者が減少しており，看護学生においても同様であることが推測される．また，近年マスコミなどで取り上げられる高齢者の問題は詐欺被害，孤独死などネガティブな内容が多い．これらの情報の影響を受けて，若者は高齢者に対してマイナスイメージをもちやすいと言われている[3]．松下ら[4]が，「肯定的イメージは肯定的態度や行動を起こさせ，否定的イメージは行動を規制する」と述べているように，相手に抱くイメージにより態度や行動が左右されることが多い．看護の場面でも高齢者と関わることが多くなり，高齢者に抱くイメージが援助の質にも影響を及ぼすといえる．

2010年度に開学部された本学では，初年度から看護学部１年次生を対象とした「老年看

護学実習Ⅰ」が実施されている．老年看護学実習Ⅰは１年次後期に，看護職者が活動する病院以外の場と対象を広げるために，高齢者施設において３日間実習をするものである．学生は老年看護学については履修前の段階であり，この実習では看護専門職者としての自覚を促し学習の動機づけを図る，学習意欲や興味を高めるなどを狙いとしている．

本研究では，学生が高齢者に対してどのようなイメージをもち，それが老年看護学実習Ⅰを通してどのように変化したかを明らかにし，今後の老年看護学の教育内容を検討する資料とする．

## ２．研究目的

老年看護学実習Ⅰ前後の学生の高齢者に対するイメージの変化を明らかにし，本学における老年看護学の教育内容を検討するための資料とする．

## ３．研究方法

### １）対象

2010年度に老年看護学実習Ⅰを行ったA看護学部１年次生80名のうち，質問紙調査に協力し回答を得た学生とした．

### ２）調査期間

2010年１月11日から１月21日までであった．

### ３）調査方法

老年看護学実習Ⅰの施設実習前後の学内実習日に，無記名の質問紙調査を行った．内容は属性，祖父母との同居の有無，高齢者に対する思い，高齢者との関わりについて及び高齢者のイメージについてであった．高齢者のイメージについては，Osgood，C．Eの考案によるSemantic Differential Method（SD法）[6]を用いた．項目は近藤ら[7]による妥当性のある17項目からなる形容詞対に７段階の尺度を設け，その値を尺度の点数とした．高齢者イメージの内容としては，行動，性格，外観によるものとした．

### ４）データ分析

高齢者のイメージ尺度の得点化は，各項目を一般的にみて好ましいと思われるイメージ（肯定的イメージ）の一方の極を基点として７，６，５，４，３，２，１，と点数化した．具体的には，「清潔―不潔」の項目では，「清潔」が７点，「不潔」が１点として７段階で得点化した．得点が高いほど肯定的イメージとした．各項目の得点平均値，標準偏差を求めて実習前後のイメージの変化と，祖父母との同居の有無によって高齢者のイメージに差があるかどうかについて分析した．データの解析にはエクセル統計2010を使用し，平均値の検定はｔ検定で行い，有意水準は５％とした．

### ５）倫理的配慮

本研究は中京学院大学看護学部研究倫理審査会で承認を得て実施した．研究対象者に対して，研究の目的や概要，研究協力の任意性，プライバシーの保護，実習評価に影響しないことなどを口頭と文書で説明した．同意の確認はアンケートの提出をもって行い，同意が得られた学生を対象に実施した．

## ４．老年看護学実習Ⅰの概要

実習目的・実習目標を表１に示した．実習期間は平成23年１月17日～21日，単位は１単位45時間であった．

初日に学内でのオリエンテーション１日，施設実習３日間，最終日に学内での全体のまとめ１日で展開した．学生は８名で構成される10グループに分かれ，それぞれのグループを

表１　老年看護学実習Ⅰの実習目的・実習目標

| |
|---|
| 実習目的<br>　高齢者の特性と高齢者を取り巻く保健・医療・福祉施設活動の実際を知り、看護専門職の機能と役割について理解する。<br><br>実習目標<br>１．施設や在宅で生活する高齢者の状況を知る。<br>２．高齢者を取り巻く保健・医療・福祉システムの現状や連携などを知る。<br>３．施設内での看護援助の実際および看護師の役割について学ぶ。 |

＊老年看護学実習Ⅰの実習目的・実習目標について、実習要項より抜粋したものである。

看護教員１～２名が担当し，学内及び施設実習において学生と共に行動した．実習の施設は，老人保健施設５施設，特別養護老人ホーム５施設であった．本実習は援助場面の見学や高齢者とのコミュニケーションを中心とした．

## ５．結果

### １）実習前の調査結果

質問紙の回収数は72名（回収率90%），そのうち67名が有効回答（有効回答率84%）であった．

性別は，男性13名（19.4%），女性54名（80.6%）であった．

祖父母との同居については，同居をしている学生は27名（40.3%），同居をしていない学生は40名（59.7%）であった．同居の内訳は，祖父と同居０名，祖母と同居14名（51.9%），祖父母と同居13名（48.1%）であった．同居している祖父母の健康状態については，無職であるが家庭内で役割をもっていると回答した学生が18名（66.7%）で一番多かった．

高齢者をイメージする対象は，祖母50名（30.5%），祖父44名（26.8%），テレビに出ていた高齢者21名（12.8%），近所の人20名（12.2%），患者・施設利用者15名（9.1%），ボランティアの対象８名（4.9%），バイト先の高齢者６名（3.7%）という回答であった．

高齢者への関心の有無については，ある49名（73.1%），どちらでもない16名（23.9%），ない２名（３%）であった．高齢者問題の関心度については，ある51名（76.1%），ない16名（23.9%）であった．高齢者に対する思いについては，好きである40名（59.7%），どちらでもない26名（38.8%），好きではない１名（1.5%）であった．

### ２）実習後の調査結果

質問紙の回収数は77名（回収率97.5%），そのうち76名が有効回答（有効回答率96.2%）であった．

性別は，男性16名（21.1%），女性60名（78.9%）であった．

実習施設の内訳は，介護老人保健施設37名（48.7%），特別養護老人ホーム39名（51.3%）であった．

高齢者をイメージする対象は，祖母60名（78.9%），祖父55名（72.4%），患者・施設利用者29名（38.2%），近所の人26名（34.2%），テレビに出ていた高齢者８名（10.5%），ボランティアの対象５名（6.6%），思い当たらない１名（1.3%）という回答であった．

高齢者への関心の有無については，ある59名（77.6%），どちらでもない16名（21.1%），

ない１名（1.3%）であった．高齢者問題の関心度については，ある56名（73.7%），ない20名（26.3%）であった．高齢者に対する思いについては，好きである51名（67.1%），どちらでもない23名（30.3%），好きではない２名（2.6%）であった．

**３）実習前後の高齢者イメージの平均値の比較**

高齢者イメージ17項目の平均値を表２に示した．17項目中12項目が中間値４を上回り，全体の平均でも実習前が4.5，実習後が4.3であった．特に平均点が高かった項目は，「あたたかな―つめたい」が5.6 ，「経験に富む―経験に乏しい」が6.0であった．平均点が低かった項目は，「忙しい―ひまな」が2.8，「強い―弱い」が3.0であり，これらは実習後に低下していた．

実習前後で高齢者イメージの変化において有意差が認められた項目は３項目で，それぞれ平均点と有意差は「穏やかな―はげしい」（5.4→5.0，$p<0.05$），「現実的な―空想的な」（4.9→4.2，$p<0.01$），「楽天的な―悲観的な」（4.3→3.9，$p<0.05$）であった．

有意差は認められなかったが実習後に平均点が上昇した項目は，17項目中３項目で，「清潔な―不潔な」（3.9→4.1），「満足な―不満足な」（4.0→4.1），「やわらかい―硬い」（4.8→4.9）であった．「独立的な―依存的な」は変化が見られず，残りの13項目については実習後に平均点が下降した．

**４）祖父母との同居の有無と高齢者のイメージの関係**

実習前の高齢者のイメージの結果について，祖父母との同居の有無による差があるかどうかについては，すべての項目において有意差

表2　実習前後の平均点とイメージの変化

| | 実習前の平均点 | 実習後の平均点 | イメージの変化 | p値 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1「清潔な-不潔な」 | 3.9 | 4.1 | ○ | 0.23 | |
| 2「あたたかな-つめたい」 | 5.8 | 5.6 | ▼ | 0.55 | |
| 3「独立的な-依存的な」 | 4.1 | 4.1 | | 0.81 | |
| 4「穏やかな-はげしい」 | 5.4 | 5.0 | ▼ | 0.01 | * |
| 5「にぎやかな―孤独な」 | 4.2 | 3.9 | ▼ | 0.12 | |
| 6「雄大な-ちっぽけな」 | 5.1 | 4.8 | ▼ | 0.07 | |
| 7「注意深い-不注意な」 | 3.7 | 3.5 | ▼ | 0.33 | |
| 8「裕福な-貧乏な」 | 4.3 | 4.2 | ▼ | 0.49 | |
| 9「強い-弱い」 | 3.3 | 3.0 | ▼ | 0.23 | |
| 10「現実的な-空想的な」 | 4.9 | 4.2 | ▼ | 0.0008 | ** |
| 11「満足な-不満足な」 | 4.0 | 4.1 | ○ | 0.57 | |
| 12「好意的な-拒否的な」 | 4.7 | 4.6 | ▼ | 0.71 | |
| 13「忙しい-ひまな」 | 3.2 | 2.8 | ▼ | 0.09 | |
| 14「楽天的な-悲観的な」 | 4.3 | 3.9 | ▼ | 0.03 | * |
| 15「やわらかい-硬い」 | 4.8 | 4.9 | ○ | 0.64 | |
| 16「経験に富む-経験に乏しい」 | 6.2 | 6.0 | ▼ | 0.41 | |
| 17「知的な-知的でない」 | 5.3 | 4.8 | ▼ | 0.06 | |
| 平均点 | 4.5 | 4.3 | ○：肯定的変化 ▼：否定的変化 | *：$p<0.05$ **：$p<0.01$ | |

高齢者のイメージについては，Osgood，C．Eの考案によるSemantic Differential Method（SD法）[6] を用いた．項目は近藤ら[7]による妥当性のある17項目からなる形容詞対に7段階の尺度を設け，その値を尺度の点数とした．高齢者イメージの内容としては，行動，性格，外観によるものとした．高齢者のイメージ尺度の得点化は，各項目を一般的にみて好ましいと思われるイメージ（肯定的イメージ）の一方の極を基点として7，6，5，4，3，2，1，と点数化した．得点が高いほど肯定的イメージとした．各項目の得点平均値，標準偏差を求めて実習前後のイメージに差があるかを分析した．データの解析にはエクセル統計2010を使用し，平均値の検定はt検定で行い，有意水準は5%とした．

は認められなかった．

同居を経験している学生は，「清潔な」「あたたかな」「にぎやかな」「注意深い」「強い」「現実的な」「満足な」「忙しい」「経験に富む」というイメージをもっていた．

## ６．考察

本研究では，学生が高齢者に対してどのようなイメージをもち，それが老年看護学実習Ｉを通してどのように変化したかを検討した．

### １）高齢者への関心や思いの変化

高齢者をイメージする対象として，祖父母と回答したものが実習後に倍増していた．施設利用者と回答した割合が，実習前後で9.1%から38.2%へ増加しており，また，高齢者への関心については，実習前後で76.1%から77.6%へとわずかながら増加した．さらに，高齢者に対する思いは，実習前後で59.7%から67.1%へと好意的な感情に変化していた．わずか３日間という短期間の実習であったにもかかわらず，高齢者への関心や思いがプラスへと変化したことは，よりよい実習体験の結果によるものであったと推測される．これから老年看護学を学習していく学生にとって，高齢者への関心や思いがプラスへと変化したことは今後の学習への動機づけにつながると考えられる．実習という経験が学生に与える影響は大きいことが伺えた．

### ２）実習前後の高齢者イメージの平均値の比較

本研究では，実習前後を通して学生のもつ高齢者のイメージが全体的に中央値よりも得点が高く，実習前の平均点が4.5，実習後の平均点が4.3であった．特に，「あたたかな」「経験に富む」の2項目については高い平均点を維持していた．これは先行研究[7]と同様の結果が得られた．「あたたかな」「経験に富む」といったイメージについては，高齢者の長所を的確に捉えており，学生が積極的に高齢者を理解しようと関わっていった結果，よい関係を築き，高齢者の良い側面を捉えたのではないかと考える．反対に，「ひまな」「弱い」というイメージを形成しており，実習後も低い得点で変化がなかった．否定的な捉え方についても先行研究[7]と同様の結果が得られた．「ひまな」というイメージについては，施設の生活の中でやることがない，役割をもっていることが少ないといった，高齢者の活動性の側面についてや，「弱い」というイメージは，介護老人保健施設や特別養護老人ホームといった，介護を必要とする施設で生活される高齢者を目の当たりにして素直に感じとったものであると考える．「ひまな」「弱い」等の行動因子は一般的に高齢者のイメージの中でも変化しにくく，それが変化するためには，接触体験より，良い実体験をもつようなかかわりが重要である[8]といわれている．今回の実習では見学を中心とした実習であったため，高齢者施設での高齢者の生活の意味を考えるところまでには至らなかったと考える．今後の学習過程で，高齢者を正しく理解できるような教育内容を検討していく必要がある．

実習前後の高齢者イメージの変化について，「穏やかな―はげしい」，「現実的な―空想的な」，「楽天的な―悲観的な」の３項目において，有意にイメージが変化しており，先行研究[7]と同様の傾向が見られた．「穏やかな―はげしい」，「現実的な―空想的な」については，平均点が実習後に下降したものの，中間値以上の得点であった．「穏やかな―はげしい」というイメージは，高齢者の情緒因子を指し[8]，　看護学生の高齢者のイメージの全体的な傾向は，情緒にかかわるイメージが高

く，学生は高齢者の精神面を肯定的に捉えているということが分かった．「現実的な」というイメージについては，施設の中であっても，食事・排泄・清潔・レクリエーションなどをしながら生活されている場面を見学して現実的であると感じとったものと考える．「楽天的な―悲観的な」については中間値を下回った．学生は高齢者とのコミュニケーションの中で，高齢者が麻痺などで思うように動けなくなり介護を必要とする状態になったことを嘆いたり，感情失禁で涙を流す姿を目にして，高齢者のイメージを「悲観的な」ものととらえたのではないかと考える．

また，有意差は認められなかったが，17項目中13項目については実習後に得点が下降した．渡邉ら[7]は，実習を通じて学生の高齢者に対するイメージは，概念的，外観的な見方から具体的，内面的な見方に変化するなど実習の積極的な効果が認められる一方で，高齢者イメージは否定的な方向に変化する傾向が認められたという報告をしている．また，笠井ら[8]は施設入所高齢者を対象にした実習について，「老人本来の姿，可能性が見えず，負の老人観の形成に繋がることもある」と指摘しており，本研究でも同様な結果が得られた．施設に入所している高齢者を対象とした老年看護学実習によって，否定的な高齢者観が形成する傾向が考えられることを念頭に置き，教育内容を検討していく必要がある．

### 3）祖父母との同居経験と高齢者のイメージの関係

今回，調査対象となった学生の祖父母との同居率は40.3%であり，平成21年の全国の三世代世帯割合17.5%を大きく上回っており同居率が高い集団といえる．

同居している祖父母の健康状態については，無職であるが家庭内で役割をもっていると回答した学生が18名（66.7%）で一番多く，学生は自立した高齢者のイメージをもっていたと考えられる．

本研究では，祖父母との同居経験と高齢者のイメージとの関係については有意差が認められなかった．これは，三輪田[9]の報告と同様の結果が得られた．高齢者をイメージしたり，高齢者に関心をもつことには，同居の経験がなくても，まず自分の祖父母を思い浮かべたり，マスメディアを通してイメージを形成していることが考えられる．

同居を経験している学生は，「清潔な」「あたたかな」「にぎやかな」「注意深い」「強い」「現実的な」「満足な」「忙しい」「経験に富む」の 9 項目において，同居の経験がない学生に比べて得点が高かった．先行研究では同居経験の有無と高齢者イメージとの関係をみると，同居経験のない学生の方が高齢者を肯定的に捉えているという報告[8]や，　同居経験はむしろ高齢者イメージを低下させる方向に作用すると報告[10]がある．本研究では異なる結果となった．同居経験のある学生の多くが，同居している祖父母について「無職であるが家庭内で役割をもっている」と回答しており，活発な高齢者のイメージをもっていたためと考えられる．

## 7．結論

本研究において以下のことが明らかになった．

① 実習前後を通して，学生は高齢者に対して全体的に肯定的なイメージをもっていた．特に，「あたたかな」「経験に富む」の 2 項目については高い平均点を維持していた．反対に，「ひまな」「弱い」というイメージを形成しており，実習前後で

の変化は見られなかった．

② 実習前後で高齢者イメージの変化において有意差がみられた項目は，「穏やかな―はげしい」，「現実的な―空想的な」，「楽天的な―悲観的な」の３項目であり，実習後に平均点が下降した．

③ 実習後に，高齢者への関心や高齢者に対する好意的感情が増していたことから，実習体験が学生の高齢者イメージの形成や変化に大きな影響を与えていると考えられる．

## ８．おわりに

今回，老年看護学実習Ⅰ前後の看護大学生の高齢者に対するイメージの変化を明らかにすることができた．しかし，本研究では施設入所されている高齢者との関わりを通してのイメージを調査したものである．教育をする側は，学生の高齢者イメージは実習を通して変化していくことを認識し，最終的には肯定的なイメージがもてるような教育内容を考えていく必要があると考える．全ての高齢者が健康を損ね日常生活に支障があるわけではなく，健康ではつらつとした高齢者も増加しているのが現状である．したがって，学生の高齢者イメージを広げ刺激するという観点から，健康な高齢者と触れ合う機会を作っていくことも重要であると考える．

## 謝辞

本研究の趣旨に賛同いただき，調査にご協力くださいましたA大学看護学部１年次生の皆様に厚く御礼申し上げます．

## 引用文献

１）内閣府：平成23年版高齢社会白書，28-58，ぎょうせい，2010.

２）厚生統計協会：厚生の指標50（9）国民衛生の動向，203-234，東京，厚生統計協会，2011.

３）清水初子・水戸美津子・流石ゆり子：老年看護学における教育方法としての体験学習―「高齢者疑似体験」学習に関する文献分析から―，山梨県立看護大学紀要，2（1），73-85，2000.

４）松下昌子：看護学生の老人イメージ―日本とスウェーデンの比較―，看護展望，22（7），828，1997.

５）近藤益子・太田にわ・池田敏子他：看護学生の老人イメージ調査のための尺度項目の構成，岡山大学医療技術短期大学紀要，4，83-87，1993.

６）神宮英夫：印象測定の心理学，62-85，川島書店，東京，1996.

７）渡辺久美・近藤益子・太田にわ他：看護学生の老人施設実習前後の老人イメージ，岡山大学医療技術短期大学紀要，8，85-90，1997.

８）笠井恭子・吉村洋子・寺島喜代子：臨地実習における看護学生の高齢者イメージの変化，福井県立大学論集，（23），107-116，2004.

９）三輪田隆子：本校看護学生の抱く老年者のイメージ，大阪医科大学付属看護専門学校紀要，6，27-32，2000.

10）大谷英子・松木光子：老人イメージと形成要因に関する調査研究（1）大学生の老人イメージと生活経験との関連，日本看護研究学会雑誌，18（4），25-38，1995.